

アスモ新聞

2008年1月4日(金)

人に喜ばれる仕事を!!のアスモは、みなさまとの新たな出会いをお待ちしております。

発行所
在宅介護センター・アスモ

創刊第28号

〒165-0026
中野区新井1-26-4 オスカーマンション2F

☎03-5318-4007

「人間万事塞翁が馬」



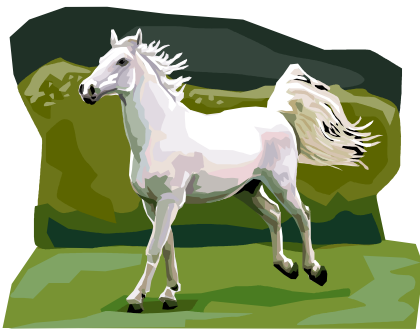
代表取締役 花堂浩一

明けましておめでとございます。本年も宜しくお願ひ申し上げます。アスモも創業依頼、おかげさまで八回目のお正月を迎えることができました。そしてこの二、三年は、私も実家に帰省することができるようになり、その間も現場を離れることなくお正月を過ごされたスタッフやヘルパーの皆様、本当にありがとうございます。

さて本年も一回目のアスモ新聞の発刊ですが、「人間万事塞翁が馬」という中国のことわざを御存知でしょうか? 「塞翁」とは北方の

「塞・塞」に住むとされた老人(翁)のことだそうです。中国の北方の塞に占いの得意な老人が住んでいました。ある日塞翁が飼っていた馬が逃げた、それを知らなかった人々が慰めに行くと、塞翁は「これは幸いになるだろう」と言った。数カ月後、逃げた馬は立派な駿馬(しゅんめ)を連れて帰ってきたので、今度は人々がお祝いに行くと、塞翁は「これは災いになるだろう」と言った。そしてまもなく塞翁の予言どおり、今度はこの駿馬に乗って遊んでいた塞翁の息子が落馬して足の骨を折ってしまったそうです。人々がお見舞いに行くと、塞翁は「これは幸いになるだろう」と言った。そして一年後、隣国との戦乱が起こり、若者たちのほとんどが戦死したなかで、塞翁の息子は足を骨折しているため兵役を免れて命が助かった、という故事です。この故事から、「幸(福・吉)」と考えることが、実は不幸の因になったり、また逆もあることのとえとして「塞翁が馬」というようになったようです。また人間のあらゆることを意味する

ということ、人間万事塞翁が馬ともいわれているようです。私たちを取り巻く状況は介護業界だけではなく、どこも厳しい年になると思いますが、そんな時、先人達が身をもって経験してきたこんな智慧をうまく自分のものにして、一喜一憂することなく乗り切っていければと思います。本年も宜しくお願ひ致します。



ノロウイルス (感染性胃腸炎)

特徴...経口感染がほとんど。

患者の便や嘔吐物に触れた手指で取り扱う食品を介して、感染を起こす。

汚染された貝類を生や十分加熱調理せず食べた場合にも感染する。

感染力が強く、吐物の処理が不十分だと、ウイルスが空気中に飛散して感染することもある。

症状...突発的に発症する。吐気、嘔吐、腹痛、下痢、発熱。通常は1~2日続く。

予防...まめな手洗いとうがい。牡蠣や(二枚)貝類などは85℃以上で1分以上加熱する。

処置...すぐに医療機関で受診し、主治医の指示に従う。

受診後家庭では安静にし、こまめに少量ずつの水分補給を心がける。

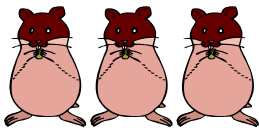
注意...患者の吐物や便の始末をするときは、十分な換気をし、手袋・マスクをする。

吐物などで汚れた衣類などはビニール袋に入れて処分の方が安全だが、

再利用する場合は、「塩素系の漂白剤・消毒剤」に十分につけ置いた後、個別で洗濯する。

吐物のついた床や患者の触ったドアノブなども「塩素系漂白剤」等でふき取る。





ハムスターの話



今年はねずみ年。ねずみ科のペットといえばハムスターが人気者ですね。ハムスターにまつわるおもしろいエピソードをご紹介します。

ある学者が、ハムスターがまわし車で遊ぶ時間帯と長さや速さを研究して、統計をとりました。そして、そのパターン通りに電動でまわし車を回転させて、ハムスターをのせました。ハムスターは動きを止めるとまわし車から落ちてしまうので、走るしかありません。運動量は、自発的に遊んでいたときとまったく変わっていません。休憩も、統計の時間どおりに強制的にとらせるようにしました。そんなことを2～3日続けていたら、ハムスターはストレスですっかり弱ってしまったそうです。

人間にもあてはまりませんか。☀

まるっきり同じことを行うのにも、強制的にやらされているとか、やらなくてはという気持ちではつらいものですよ。気持ちの持ち方ひとつで身体にも影響がでるのでしょうか。

……そういえば、サビ責からこんな話を聞きました。

限られた時間内での入浴介助で、セカセカ、イライラと入浴していた方が、入浴時間にゆとりをもたせることができるようになってから、入浴を楽しんでできるようになりました。もともとお風呂好きだったこともあり、積極的に入浴始めて、日に日に能力も向上していきました。お風呂が生きがいになったのでしょうか、とはサビ責の談です。



同じことをやるのであれば、楽しんでできるように、工夫してみるのもいいかもしれませんね。

シリーズ3

なかのものがたり

〰〰本町

中野長者 鈴木九郎と成願寺



室町幕府四代将軍、足利義持の時代、武蔵の中野の里に、みすばらしい姿をした一組の夫婦が訪れました。男の名は鈴木九郎といい、紀州(今の和歌山県)から流浪の旅の末、たどりついたもので、かつては武士でした。

草深い中野の里に住み付いたこの夫婦は、毎日一生懸命、朝はまだ暗いうちから夜は星がまたたくまで、荒地を開墾し、数年後には、見渡す限り立派な麦畑にかえてしまいました。それから、とんとん拍子にお金がたまり、さらに数年後には、家も大きく立派なお屋敷となり、まわりには白壁の土蔵がいくつも建ちならび、使用人も大勢雇い、中野長者と呼ばれるようになりました。長者夫婦には、娘も生まれ、幸せな日々をすごしており、里人からは「あれが中野長者の家だ」とうらやましがられるほどでした。

ところが、ある日、最愛のひとり娘が急に苦しみ出して、あつといつ間に死んでしまったのです。しかも、その死体は蛇の姿に変身しているのです。長者夫婦は大変おどろき、なげき悲しみました。相州(神奈川県)最乗寺の住職に頼み、夜を徹して読経したところ、明け方にやっと娘は元の姿にもどり昇天しました。

中野長者鈴木九郎は、人間の幸福はお金や名誉ではないことをさとり、菩提心をおこし、禅門に入って、自分の家屋敷をこわして寺を建てました。娘の法名から字をとって、「正観寺」と号し、永く娘の菩提をとむらったということです。

この寺は、永禄(一五六〇年)頃に、成願寺と改められました。現在、本町二丁目にある成願寺のことです。

